

【報告】

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究
「人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関」第1回合評会

日時：2014年11月30日（日）15時00分～19時00分

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 306室

参加者：17名

プログラム：

1) 著者による概要説明

佐久間寛(AA 研)

2) コメント

関谷雄一(東京大学)

崎山政毅(立命館大学)

杉島敬志(京都大学)

3) 全体討議

内容：

本合評会——所員の著作を対象とする初の合評会——では、佐久間寛著『ガーロコイレ——ニジェール西部農村社会をめぐるモラルと叛乱の民族誌』（平凡社、2013年）をとりあげた。

はじめに、著者が口頭で概要説明をおこなった。行政村分裂の「真相」が語られなかったという著者の調査経験には、土地制度をめぐる国家と社会の葛藤が埋めこまれていたとの見解がしめされると同時に、今後の研究の展望が「情動」というテーマにそって紹介された。

これを受けてまず関谷が、ニジェール人類学研究者としての立場からコメントをおこなった。本書が Rouch、Olivier de Sardan、Dagobi などによるニジェール人類学研究の蓄積の上に成りたっている点が指摘されるとともに、人類学徒による長期単独調査の成果である本書にたいし、複数のアクターの協同からなる「開発」という視点から農村社会の現実を捉える必要もあることが指摘された。つぎに、ラテンアメリカ地域研究および土地と資本の社会科学的な理論研究で著名な崎山からは、本書で採用されているバランディエ学派の議論や「強い所有」の概念がシェーマ主義的で周辺資本主義の現実とは相容れないことが指摘される一方、一回性の出来事を掬いあげようとする本書の民族誌的スタンスは「マイクロ・マクロ系の連関」に肉薄する試みとして評価できるとの発言があった。

最後に、人類学的土地制度研究の第一人者である杉島は、オーストロネシア世界をめぐる最新の研究成果や自身のフィールドデータを援用しながら、本書には先着原理を実体論的に理解するという誤謬がみとめられること、また、土地利用を歴史的なコミュニケーションの過程として捉える視点（「土地の履歴書」）が欠如していることを指摘し、「土地は誰のものか」というオブセッションにとらわれた本書の限界を明らかにした。

以上のコメントにたいする著者の応答の後、フロアーも交えながら、白人表象、土地制度とジェンダー、環境論の可能性、出稼ぎ労働の問題など、多彩な主題をめぐる議論が交わされた。締めくくりに、厳しめとも受け取れるコメントがあった杉島から、本書に英訳出版の価値があるという激励の言葉と、そのためには序論と結論を書き下ろすべきとの具体的助言があり、大団円の閉会となった。

当報告の内容は著者の著作物です。Copyrighted materials of the authors.